

二 墻外底の道は即ち禁内底

眼を閉ぢて通つては色も艶も見えぬ。耳を塞いでゐては聲も音も聞えぬ。眼を開けよ。耳を敬てよ。救済は到る所に示されてある。自然界にせよ、人事界にせよ。見る物の上にも、聞く者の上にも、すべて救済は示されてある。照る月の上にも、咲く花の中にも、散り行く木の葉の間にも、流るゝ水の底にも、救済はある。親の上にも、友の上にも、我身の上にも、日々起り來る社會の事變の裡にも、救済は明に示されてある。聞けよ、こゝに滾々として救済の泉が湧く。看よや、そこに爛漫として救済の花が咲く。天地は皆救済の顯現に外ならない。たとひつまらぬ些細なことの様ではあつても、何事の上にも心を留めて味ひ來れば、汲みてもく盡きせぬ味が溢れて參るのであります。

此點よりして強ち筈一本ではない、扇一本でも悟は得られる。僧あり、麻谷寶徹禪師に問ふた。「如何なるか是れ、風性常住無處不周底の道理」。禪師何も云はずにイキナリ扇子を使はれる、僧怪しみて「承はり及ぶ、風性常住にして處として周ねからずと云ふことなしと。和尚何によつて扇子を用ひ給ふ」と云ふ。禪師答へて「汝、風性常住を知れると雖も、未だ處として至らずと云ふことなき道理を知らず」と。成程風はお前の云ふ通り宇宙に遍滿して居るが。併し扇子がなければ風が出て來ぬでないかと誠められた。扇子によつて風を出す、風は暑熱を拂ふものである。修行の扇子によつて智慧の風を起し、精神の暑熱煩惱を拂ふ。亦快ならずや。

本願にめぐり扇の要にて、たゞ尊やと仰ぐばかりぞ

これは如來の本願に値遇せる嬉しさの、限りを詠んだのです。

「春風以和人、雷霆以警人、霜露以肅人、氷雪以固人、風雨

さうろをしへにあらざるなし 霜露無非^レ教^ル『言志録』と。然り「青々たる翠竹、般若にあらざるなく、鬱々^クの香華、豈に實相ならざらんや」。我等の四邊恩寵ならざるはなく、周圍教旨^シならざるはない。「如來の眞身は本二なし、物に應じて形を顯はし世間に満つ」とや。『華嚴經』と申すは誠に尊い御經であります。此中に私共の一日中の仕事に就ての用意が懇に説かれてある。妻子打集ふた時には、一切の怨親平等にして永く貪着を離るゝやうに思へ。家を出でゝ道を行く時には自分も亦佛の道を履んで悟に至らんを思へ。坂路を上る時には、此三界を出づるに就いても、心に怯弱を抱かぬ様に思へ。坂路を下る時には、心を謙下りて長く善根を積まんことを思へ。塵多き道ならば、自分に引き比べて、塵土を離れ清淨の法を得るやうに思へ。塵なき道ならば、自分も常に大悲を行じて、心を潤澤さんと思へ。柔なる美味しい食を得れば、大悲の燻ずる所我が心も斯くの如く柔軟ならんことを思へ。貧しき堅き食を得なば、心に染着なく世間の貪着を絶つ様に思へ。其の外澤山な場合に就いて非常に叮嚀に示されてあります。決して私共の力で、飛付くことも出来ぬ様な、高いく理窟ばかりは教へて下さらぬ。私共の日々夜々、家庭や日暮の上に於て突き當る、いろいろの事柄や問題に就いて、親しい手近い所で、私共の心の向く様を示して下さるのである。之を見究めねばならぬ。

道は何れにありや。道は何處にあるかと云ふか。近く汝の脚下にあり。昔は趙州從諗禪師、南泉普願和尚に問ふて、「如何なるか是れ道」と氣張込んで云はれると、和尚言下に「平常心是れ道」と答へられたので、趙州は忽ちに頓悟せられた。成程手近い。平常の心是れ道。常並の心夫れが取りも直さず道ぢやと云ふのである。之によつて頓悟せられた趙州禪師に、一僧ありて問ふ「如何なるか是れ道」道とは全體何を云ふのでありますか。師曰く「墻外底」墻

根の外にあるぢやないか。すると僧曰く「這箇の道を問はず」そんな道を問ふのではありませぬ。師曰く「那箇の道を問ふ」那箇道を問ふのか。僧曰く「大道」大きな道を聞くのです。師曰く「大道は長安に透る」ウン大道か、大道なら帝都長安に透つて居るぞ、と斯様に答へられた。

斯道は元來一相平等にして、墻外底直に禁裡に達す。王公も行き庶民も歩す。遠く千里に達せんとする者も、近く歩を我簷下に發せねばならぬ。「道は邇に在り却て之を遠きに求む」。足下にあるものを頭の上に向つて求めて居る。「事は易きにあり却て之を難きに求む」。人間は氣が利いて居る様で、間が抜けて居る事が多い。「道は須臾も離るべからず」。朝むつくり起きた時にも道がある。顔を洗つて仕事に懸る時にも道がある。私共は常に、道の上につて道の上に働き、道の上に寝ると云ふ風に、日々の行事の上に、行住坐臥時處所縁の上に、如來本願の大道は坦々として開けて居るではないか。